

中で占める役割とかによつて特別になるわけではないんです。

——最終的に理解できないことを知った上で人間が集まっているのが社会であるという。そういうものの集合の中に自分もいると考えないと。

内田 「ワン」というのが僕はなんだか納得がゆかないですね。キーワードは「複雑」ですから。えらてんさんだつて、1分前と今ではもう別の人間になっている。新しい経験を一つするたびに、言葉を一つ聞くたびに、過去の記憶はそのつど全部再編されている。僕たちは過去をたえず再編集しながら生きている。だから、自分の人格特性だつて、どんどん変わっているし、どんどん複雑になっているはずなんです。

僕は「オンリーワン」とか「アイデンティティ」とか「自分らしさ」というような言葉が嫌いなんです。いいじゃないですか。自分がいつも自分らしくなくても。だつて、人間って複雑なんです。僕の中には男性の要素もあるし、女性の要素もある。幼児性もあるし、老人性もある。誇り高いところもあるし、卑屈なところもある。気前のよいところもあるし、ケチくさいところもある。そういうもの全部含めての僕なわけです。そういう星雲的な、不定形なものとしてぐじゃぐじゃと存在しているわけですよ。

その時々の場合において、とりあえず自分のできる最適なことをしようとする、という人格が出てくるかはケースバイケースで変わる。誰が相手でも同じことを言うわけじゃ

ない。相手が変われば、言うことはまるで変わる。まるで反対のことを言うことだつてあります。そういうものだと思います。だから、「ほんとうのお前は何ものだ」と訊かれたつて、答えようがない。

人間は「オンリーワン」じゃないですよ。そもそも「ワン」じゃないんだから。「自分探し」とか虚しいことはもうやめましょうよ。そんな固定的なものは存在しないんだから。そんな虚しいものに囚われて、思考や行動の自由を自分で制約してどうするんですか。それよりは星雲状の、アモルファスな存在でいて、あちこちにいつばい穴が開いていて、そこからいろいろなものが入り出している、そういう複雑なシステムとして自分をとらえてみたらどうです。

成熟するとはあらゆる年代の自分をあわせ持つこと (内田)

内田 学校教育は戦後のある時点から「工業製品を作る」という産業形態に準じて、制度設計されるようになりました。それは適切に管理された工程をたどつて、仕様書とおりの「製品」ができてゆくプロセスを教育についても理想とする考え方です。だから、少しでも仕様と違つたと欠陥品としてはじき出される。工程管理を妨害する「バグ」は周到に排除された。

でも、そういうメタファーで教育が語られるようになったのは、単に「工場で工業製品を製造する」ということが産業の一般的なかたちになったからなんです。支配的な産業が農業から工業に遷移したので、それに合わせて、教育も「そういうものであらなければならない」と思い込んだというだけのことなんです。

その前の時代、僕が初等中等教育を受けているころは、学校教育は農業のメタファーで語られていました。種子を蒔き、肥料や水をやって、あとは太陽と土壌に任せておくと、収穫期になると「何か」が採れる。本質的に農産物は自然の恵みであつて、人間が100パーセント工程管理することなんかできない。実際に教師も親もそう考えていた。でも、それは単に1950年代までは、日本人の50パーセントが農業従事者だったから、自分たちがふだんやっている産業形態のイメージをそのまま学校教育に当てはめたというだけのことなんです。そういうものなんです。

学校教育に僕たちが当てはめるイメージというのは、その少し前の時代に支配的だった産業構造を惰性的に模写したものに過ぎないんです。「工場での工業製品を製造する」というのは第二次産業が支配的な業態だった前期産業社会に固有のメタファーです。「教育の質管理」とか「PDCAサイクルを回す」とか「シラバスによる工程管理」とか、そういうのは全部「工場でものを作る」ための作業なんです。実際にはもうそんな時代はとっ

くに終わっているのに、人々はまたそんな時代遅れのメタファーを使って、学校教育を論じている。政治家も、教育官僚も、ジャーナリストもその点では同類です。

子どもたちを仕様書通りに育てなければいけない、工程の品質管理でひっかかって欠陥品としてはじかれるようなことがあつてはいけないというふうにみんな怖がつてますけれど、その恐怖そのものが前期産業社会の製造工程を人間に適用しているから起きることなんです。どうして子どもを誰かが書いた仕様書通りに育てなくちゃいけないんですか。子どもたちはみんな違っているし、みんな複雑なんですから、複雑なまま育てればいじやないですか。「私はこれこれこういう人間ですと自己規定して、それを言葉にしてずっと維持してゆく」というアイデンティティ圧力というのは、工業製品に固有のものなんです。缶詰や乾電池だったら、規格化しないと使えない。だから、つよい同質化圧が学校教育で働く。すべての製品は初期設定から逸脱することを禁じられている。一度仕様書に組成や性能や用途を定められた製品は、途中で仕様を変更することが許されない。いまの日本社会では、その「仕様変更の禁止」のことを「アイデンティティ」と呼んでいるんです。そんなものを後生大事に抱えてどうしようつていうんですか。

どんどん変わっていいんです。いくら変わっても、変わらないものがある。どんなに次々と違うことをしていても、何か「指紋のようなもの」は残る。必ず残る。それは自分で構

築するものじゃないし、探しに行くものでもない。自分にはどうしようもない、唯一無二性の^{しほ}徴なんです。探し出すものでも、自作するものでもないし、抑圧しようとして抑圧できるものでもない。

もし、現代において支配的な産業構造のメタファーを適用するとしたら、「離散的なネットワークの中で、さまざまなアクターが自由に出会うことでそのつど一回的に価値物が創造される」というイメージになるはずなんです。実際にそうなんですから。だから、教育も遠からず、工業製品ではなく、機能とか情報とか生命力とか、そういう「かたちのないもの」を原イメージとして組織化されるようになります。これまでもそうだったんだから、これからもそうなるに決まっている。そういう時代に前時代的なイメージを押し付けているから、学校教育が機能不全に陥るのは当然なんです。

たとしたら、これからの教育は学校で斉一的に教育されるのではなく、むしろ自己教育というものになると思います。自分のための教育環境そのものを自分で手作りして、自己教育する。そういうかたちのものになると思います。必ず、なる。

その場合の自己教育の目標は一言で言えば、複雑化ということです。教育環境を選ぶ場合に、子どもたちは「自分がそのプロセスを経由することで、どれだけ複雑になれるか」、それを問う。生物の進化というのは複雑化ということですから。単細胞が分裂して、二つ

になり、四つになり、複雑な機能を備えた生物になる。個人の成熟もそれと同じことだと僕は思います。成熟というのは複雑化ということなんです。どんどん「わけのわからないもの」「一筋縄ではゆかないもの」になってゆくことが成熟なんです。

僕自身だんだん加齢してきてわかったのは、年をとると人間はだんだん複雑になるということでした。だって、僕の中には、幼児期の自分もいるし、少年期の自分もいるし、中年の自分もいるし、定年を迎えた60歳の自分もいるし、古希を迎えてどうやって死のうか考えている自分もいる。その全員が僕の中にいる。その一人一人が間違いなく僕自身なわけです。だから、複雑なキャラクターにならざるを得ない。成熟するとはそういうことだと思います。

いまのこの社会の犯している最大の誤謬は「単純であるのはいいことだ」という信憑です。どんな場合でも、同じように考え、同じようなことを言い、同じようにふるまう首尾一貫したアイデンティティを持った人間でなければならないという強い自己同一化圧がかけられている。就活では「自己アピール」しろというようなことを言われるらしいけれど、僕はそういうことを聞くと寒気がしてくるんです。どうして「自分はこれこれこういう人間です」なんてことを言わせるんです。そんな自己規定は、口に出した瞬間に「呪い」として機能して、自己を呪縛することにしかならないんですから。若い人にそんなことを

言わせちゃいけない。「あなたは一言で言っただけでどういう人間ですか？」なんて愚かしい質問はしないで欲しい。「あなたの長所はどこですか？」なんて、知るかよ、バカ野郎です。

矢内 その場に出てくることもあれば、出てこないこともある。

内田 そんなの、あなたが決めればいいじゃないか、ということです。僕が何ものであるかは、そのつとの関係でしか決まらないことなだから、あなたが「内田というのはこういう人間だ」と思い込んだら、あなたにとってはそういう人間なだから、それでいいじゃないですか。でも、僕はあなたが思っているような人間じゃないというだけのことです。

そういう生命の自然から反することをさせないで欲しいんです。社会制度が人間に複雑化すること、成熟することを禁止している。これはほんとうに罪深いことだと思います。そういう圧力に対しては僕は断固としてノーと言いたい。自由に、複雑にさせておいてくれよ、ということです。「話を簡単にしろ」と言われたら「いやだ」と言う。「要するに」と言われた「要するな！」と。

矢内 いいですね。「要するのはやめましょう」はすごく賛成です。

内田 「要するに何が言いたいわけですか」と言われると、本当に絞め殺したくなりますよ。

先祖と宗教と

第5章

ユークリバー